カトリック高円寺教会教会報

いしずえ

2026 1・2・3 月号
〈合併号〉

第653号 2026・3・22 〒166-0003 東京都杉並区高円寺南2-33-32 TEL 03-3314-5688 FAX 03-3314-8954

回心への招き

主任司祭 高木 健次

「さあ、目を上げて、あなたがいる場所から東西南北を見渡しなさい。見えるかぎりの土地をすべて、わたしはあなたとあなたの子孫に与える。（中略）さあ、この土地を縦横に歩き回るがよい。わたしはそれをあなたに与えるから。」（創世記13・1～17）

これは神様の呼びかけによって旅を続けた信仰の祖アブラハムへの神様の言葉ですが、アブラハムだけではなく、信仰における子孫であるわたしたちへの言葉でもあります。神様は目に見える世界をすべて私たちに与えて下さると言うわけです。しかし注意しなければならないのは、神様の「与える」とは所有物とするという意味ではない点です。アブラハムがその生涯で自分の所有地とできたのは、妻サラを葬るためのわずかな土地だけでした。神様が「与える」とは、恵みとして与えるということで、その意味は、感謝して受け取る（受け入れる）対象として示されることだと言えるでしょう。そして神の恵みとして感謝して受け取る（受け入れる）ことをさらに言い換えれば、愛するということになるわけですが、ここから、冒頭のアブラハムへの神様の言葉は、この世界であなたは、愛することのできる相手や環境を必ず見つけ出すことができる。それを求めてでかけて行きなさいという励ましの言葉として受け取ることができると思います。

一方で聖書には、神様によって「与えられる」ということについてもう一つのテーマがあります。それが四旬節とも深くつながっている、神の民の荒れ野の四十年の旅です。この旅の間、民は人間の目には何も得るものがないように見える荒れ野でも、自分たちを生かす神様の恵みがあることを知るように、神様が「与えてくれない」のではなく、すでに「与えられている」ことを知るようにと、繰り返し教育されました。こちらは愛する相手を求めて出かけていくというよりも、どのような相手の中にも、どのような場をも愛する、すなわちそこに神様の恵みを見いだすために心の目をひらくようにとの招きだと言えます。これは実に難しく、神様の助けなしには不可能なことでしょう。この助けを求め続けるのが回心の歩みです。